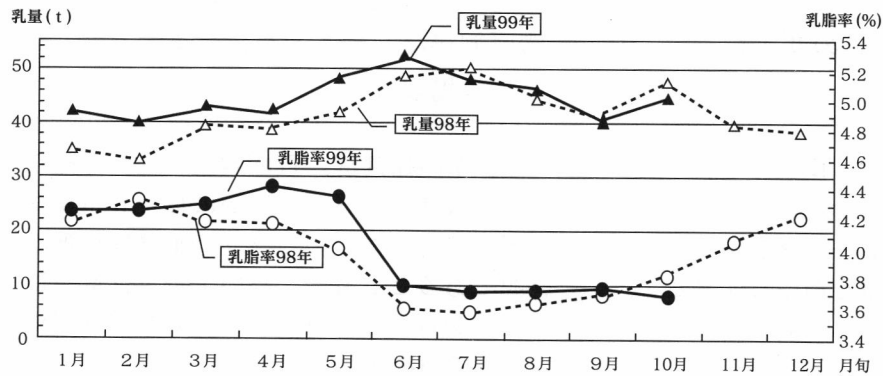


乳脂肪率の向上事例

1. A農場－良質粗飼料給与による改善事例



生乳生産実績 (98年乳検等)

生乳出荷量	495 t
平均個体乳量	7586kg
平均乳脂肪率	3.89%
平均乳蛋白率	3.24%
H 9 乳代単価	72.2円
H 10 乳代単価	75.8円

図1 生乳生産と乳脂肪率の推移 98年1月～99年10月生乳旬報より

(1) 生乳生産と乳脂肪率の推移

A農場における生乳生産量は、ほぼ昨年並に推移しています。

また、乳脂肪率では、舎飼期に入る11月から高く推移し、特に99年4から5月では4.0%を越える旬もありました。

しかし、放牧期の乳脂肪率は低く推移し、栄養バランス改善が必要とされます。

(2) 飼料給与メニュー

泌乳最盛期30kg設定

(給与量/日・頭)

粗飼料	濃厚飼料	添加剤他
グラスサイレージ1番 飽食 ロールサイレージ1番 飽食	配合CP20、TDN74 8.0kg ビートパルプP 4.0kg 圧ペン大麦 1.5kg リンカル 160g	ビタコーゲン 120g 鋳塩 自由採食 重曹 自由採食

(3) 乳脂肪率改善に向けた取り組み (聞き取り)

項目	継続	改善前	改善後
サイレージ調製時期		開花期調製	出穂期調製
サイレージ調製切断長		通常ロールベラー	カッティングロールベラー導入
飼料給与		ビートパルプP夏給与	通年給与化
放牧管理	夜間放牧 (暑熱時)		

(4) 取り組みと改善に対する考察

牧草サイレージの適期収穫により、嗜好性の良いサイレージを調製しています。また、ラップロールサイレージの調製では、カッティングロールベラーの導入やビートパルプの通年給与により、乾物摂取量が増加し、高い乳脂肪率が達成されています。

暑熱時の乳成分対策としては、夜間放牧の実施など、放牧期の飼養管理改善についても検討が進められています。

2. B農場－定期的な粗飼料分析と飼料設計による事例

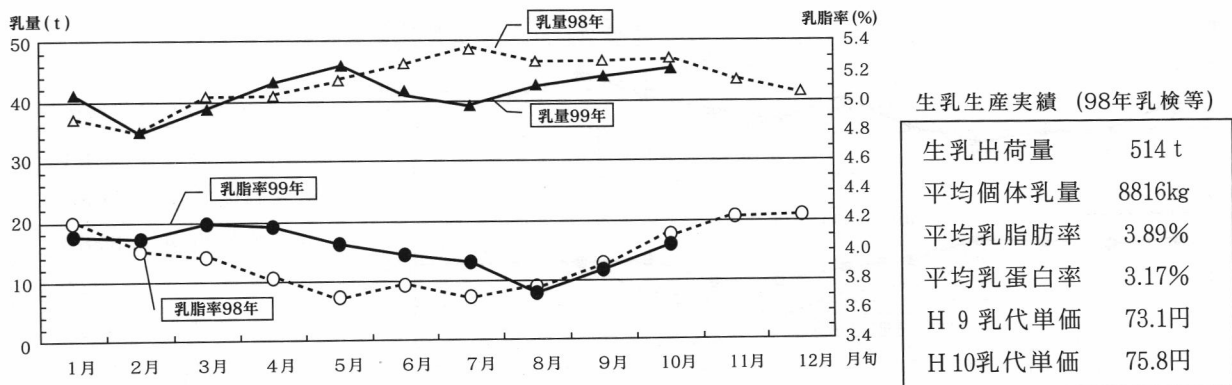


図1 生乳生産と乳脂肪率の推移 98年1月～99年10月生乳旬報より

(1) 生乳生産と乳脂肪率の推移 (98年1月～99年10月 生乳旬報より)

B農場における生乳生産量は、99年8月の猛暑時の低下を除き、ほぼ平年並に推移しています。乳脂肪率も8月は同影響により大きく低下したものの、全体的に昨年実績を上回る高い成績で推移しています。

(2) 飼料給与メニュー

2群分 A群－乳量30kg以上設定

(給与量/日・頭)

粗飼料		濃厚飼料		添加剤他	
グラスサイレージ1番	45.0kg	配合CP18、TDN75	7.0kg	ビタミン剤	50～100 g
ルーサンキューブ	1.2kg	圧ペントウモロコシ	3.0kg	第2リンカル	100 g
		ビートパルプP	3.0kg	粉碎塩	50 g
		ルーサンP	1.0 g	重曹	70 g

(3) 乳脂肪率改善に向けた取り組み (聞き取り)

項目	継続	改善前	改善後
サイレージ調製時期		開花期調製	出穂期調製及び早期密封
飼料給与	TMR給与 (92年～) 定期的な粗飼料 分析と飼料設計	栄養充足率 (99年設計値) 体重 650kg 乳量 30kg設定 DM101.1%、CP100.9%、TDN105.0%	

(4) 取り組みと改善に対する考察

定期的な粗飼料分析、飼料設計の実施により、ルーメン環境と栄養充足を考慮したTMRが給与されています。

また、牧草サイレージ収穫を出穂期に実施し、早期密封調製したことにより、嗜好性向上に伴う乾物摂取量が増加しました。

それにより、乳脂肪率が改善されました。

しかし、例年2月から8月にかけて2番刈りサイレージに切り替わるため、嗜好性低下にともなう乳脂肪率の低下が今後の課題となっています。